

バラエティあふれる17カ所の温泉を、  
5・7・5のリズムで歩こう!

# 下関温泉ハイク絵図



地図||横川功

今回の下関・温泉はしご中、人生をやり遂げてしばしの憩いのため温泉宿に泊りにきたという風情の上品なご夫婦と出会った。当日その宿には、今を盛りに輝いている女子大生グループもいて、老夫婦の達成感に満ちた存在感が際立っていた。

### 共白髪湯の面にゆらぐ薄紅葉

(できるだけ創作はしない。自己の心境を)

前述のように、その宿は老若男女でにぎわっていた。小生はもともと一人旅が好きだが、こういう中に埋没し、宇宙の塵となり無となり、誰が詠んだかわからないような句を自然発生させるのが、俳句の極意かもしれぬと、今これを書いている時点では思っている。

### 関の温泉や五七五のおでん鍋

〔温泉〕を「ゆ」と読ませて字数を稼ぐ「あてルビ」はいただけないが、下関の温泉情緒と発句の因果関係は伝わってくるので、大目に見よう)

※拙句の後に続く( )内の文面は、各温泉の湯気に浮き出た(?)コメントです。

## 黛まどかさんによる五句の解釈 文・編集部

### 旅立ちも旅の終わりも竹の秋

(10ページ)

山々が新緑を湛える春に、竹は逆に葉を落とすので、「竹の秋」と呼ぶ。春の季語。田上菊舎の故郷は竹やぶが多く、黛氏が旅の最初に、また旅の終わりに目にしたのも、竹の美しさであった。おそらく菊舎も旅立ちと帰郷の度に目にしたのが、四季折々の竹の美しさだっただろう。黛氏自身の旅と菊舎の旅そして人生を重ねて詠んだ。

### 鳥雲に潤みてともる岬の灯

(11ページ)

鳥が雲の高みに帰っていく。そんな夕刻の淡い時間に、潤んだような岬の灯がともり始めた。旅先の叙情を詠んだ。

### ねずみ島鳩島浮かべ明け易し

(12ページ)

旅先では不思議と朝早く目が覚める。角島大橋を渡るとほぼ真ん中付近に浮かんでいる鳩島。遠くに目をやれば鼠島も浮かんでいる。明け方の光に二つの島が浮かんできた。今日は晴れるだろうか。

### 落人の村とも春の落葉焚き

(13ページ・上)

菊舎ゆかりの地を巡っているうち、春というのに落葉を焚いている光景に出会った。のどかな春の野が、なぜか落人の村のようにも見えてきた。本州西端の地にあらば、そのように思えるのだろうか。

### 轉を聴くかに墓の傾ける

(13ページ・下)

春の盛り、鳥たちも縦横に飛び回り、口々に鳴いている。没後185年にもなる菊舎の墓はややもすれば傾き加減だが、それも今は俳人の性で、鳥の声に耳を澄ましているように映る。